ペトロシネッラ　　イタリア

昔むかし、あるところに、男とおかみさんが住んでいました。その家のとなりには、魔女の畑がありました。

あるとき、おかみさんのお腹に赤ん坊ができました。すると、おかみさんは、魔女の畑のみごとなパセリを、食べたくてしかたがなくなりました。おかみさんは、毎日、窓際に立って畑を見下ろしました。とうとう、ある日、魔女の留守のあいだに、おかみさんは、畑に下りて行きました。そして、パセリをひとつかみぬすみました。

魔女は、帰って来て、だれかが畑に入ったことに気づきました。そして、大声でさけびました。

「どろぼうねこはだれだ。見つけて思い知らせてくれる」

そうとは知らず、おかみさんは、それからも何度もパセリをぬすみに行きました。

ある日、おかみさんが畑に入って行くと、魔女があらわれ、手をつかんで、いいました。

「とうとうつかまえたぞ。この盗人め。わしのパセリに手をつけるとは。大胆なやつだ」

おかみさんは、

「どうかゆるしてください。お腹に子どもができてから、パセリを食べたくてしかたがなくなったのです」といいました。魔女は、

「じゃあ、ゆるしてやろう。だが、生まれて来る子が男だろうと女だろうと、わしにくれると約束するんだ。さもなければ、おまえの命はないよ」といいました。おかみさんは、約束するほかありませんでした。

やがて、おかみさんは、たいそう美しい女の子を生みました。女の子のむねには、パセリの形のあざがありました。それで、親たちはその子に、パセリという意味のペトロシネッラと名前を付けました。

ペトロシネッラは、七歳になると、学校へ行くようになりました。すると、毎日、道のとちゅうで、魔女に会いました。魔女は、そのたびに、ペトロシネッラに、

「かあさんに、約束を忘れるなといっておくんだ」といいました。

おかみさんはそれを聞くたびに、心を痛めましたが、あるとき、とうとうこういいました。

「こんど魔女にあったら、こういっておやり。勝手に持って行きなって」

つぎの日、ペトロシネッラは、また魔女に会いました。魔女は、

「かあさんに、約束を忘れるなといっておくんだ」といいました。ペトロシネッラは、

「かあさんは、勝手に持って行きなっていってたわ」と答えました。すると、魔女は、すぐさまペトロシネッラの髪をつかんでひっぱっていきました。

魔女は、大きな暗い森まで来ると、ペトロシネッラを高い塔に閉じこめてしまいました。その塔には入り口も階段もなく、小さな窓がひとつあるだけでした。ペトロシネッラが窓から長い髪を下ろすと、魔女はその髪を伝って塔に上っていくのでした。

あるとき、この国の王子が、塔のそばを通りかかりました。そして、窓のそばで髪をすいているペトロシネッラを見ました。その姿がたいそう美しかったので、王子は声をかけました。それからは、王子は毎日塔の下にやって来て、ふたりは言葉を交わしました。

月が星たちとかくれんぼする、ある晩のこと、ペトロシネッラは、塔の窓から金の髪を下ろしました。王子がその髪を上ってペトロシネッラの部屋にやって来ました。それからというもの、ふたりは、魔女に気付かれないように気をつけて、何度も塔の上で会いました。

ところが、ある晩のこと、召し使い女が、魔女にいいました。

「おくさま、お気を付けください。この国の王子が、しょっちゅう、お嬢さまの所に来ています」

魔女はおどろき、腹を立てました。が、召し使い女にいいました。

「大丈夫だよ。ペトロシネッラが逃げることはできないよ。台所の梁の上にかくしてある三つのドングリを手に入れないかぎり、わたしからは逃げられない」

ペトロシネッラは、戸のかげで、この話をすっかり聞いていました。

夜が闇のマントを空いっぱいに広げたころ、王子がやって来ました。ペトロシネッラは、王子に、

「台所の梁の上のドングリを取ってちょうだい」といいました。ドングリを手に入れると、ふたりは、縄ばしごをつなぎ合わせて塔から下り、町をめざして逃げだしました。

魔女は、すぐに気が付いて、ものすごい勢いでふたりを追いかけて来ました。ペトロシネッラは、ドングリをひとつ後ろに投げました。すると、ドングリは恐ろしく大きな犬になって、口をいっぱいに開き、魔女を一飲みにしようとしました。魔女は、ポケットからパンを取りだし、犬に向かって投げつけました。たちまち犬はおとなしくなってパンを食べはじめました。

魔女は、またふたりを追いかけて来ました。ペトロシネッラは、ふたつ目のドングリを投げました。するとドングリはライオンになって魔女を一飲みにしようとしました。魔女は、野原で草を食べていたろばをつかまえ、皮をはいで頭からかぶりました。そして、ライオンに向かってとびかかりました。ライオンはおびえて逃げだしました。

魔女は、また追いかけて来ました。ものすごい靴音がせまってきて、土ぼこりが空までまいあがっています。ペトロシネッラは、三つ目のドングリを投げました。するとドングリは、オオカミになって、ろばの皮もろとも魔女をひと口に飲みこんでしまいました。

ふたりは王子の国に行き、いつまでも末永く幸せに暮らしました。

原話：『ペンタメローネ』ジャンバッティスタ・バジーレ著／
杉山洋子・三宅忠明訳／大修館書店
再話：村上郁